

# 万吉だより

MA GE CHI NEWS

創刊号 平成15年3月

## 発刊の辞

館長 坂詰秀一

立正大学博物館が開館して、早くも1年が過ぎようとしています。この間、沢山の人びとが来館されました。熊谷・江南地域とその周辺の人、遠くからの研究者、近隣の都県、そして市町村で教育・博物館の仕事に従事している人などに加えて、立正大学の卒業生、在学生の父母、学生諸君、さらに埼玉県内をはじめ隣接する諸県の高校生グループが先生の引率のもとに訪れました。会館に際して用意した「案内」のパンフレットは、夏過ぎには底をつき、秋には増刷するという、うれしい誤算に悲鳴をあげました。

一寸、遅れましたが、館報『万吉だより』をお届けします。立正大学博物館の『館報』のタイトルに「万吉」の2文字が付けられているのを不思議に思われる方もおられましょう。「万吉」は「まげち」と呼ばれていました立正大学熊谷校地の地名です。「万吉」の地は、古く中世には「しゅんぼるのしょう春原庄之内万吉郷」と呼ばれていました。近世に入り、寛永16(1639)年には忍藩領であったことが知られていますし、慶安2～3(1649～50)年に成立したと考えられています『武蔵田園簿』(別称『正保田園保』)には「大里郡万吉村」[690,418石]とみえています。『武蔵国郷帳』(天保5-1834年)には「万吉村」[830,065石]とあります。そして、明治22(1889)年の市町村制執行によって「大里郡吉岡村」となり、後に「熊谷市万吉」となり現在にいたっています。

この万吉の立正大学熊谷キャンパスに開設された博物館の前身は、昭和7(1932)年に大崎キャンパスに設けられました考古学標本室です。以降、考古学資料室として機能してきました。

一方、昭和53(1975)年には熊谷校地内遺跡調査の結果を広く社会に公開することを目的として考古学陳列室が設置されました。二つのキャンパスにそれぞれ設けられてきました施設をもとに、立正大学創立130周年記念事業の一つとして、この度、立正大学博物館が開設されたのです。

旧制大学以来の伝統のもとに立正大学に収蔵されてきた学術史・資料は、考古学をはじめ多くの分野にわたり、その量は膨大です。博物館の開設によって、いま、それらの資料が公開されることになりました。

万吉の地から立正大学のステータス・シンボルの一つとして貴重な資料が公開され、それに纏わる多くの情報が開示されることになりました。『万吉だより』は、博物館活動を通じて立正大学の学術研究の成果、教育活動の実際を広く学内外の皆さんにお知らせすると共に、開かれた大学の窓としての役割を果たしていきたいと願っています。

## 立正大学博物館 開館記念式典

平成14年4月1日(月)熊谷キャンパス・ステラ1階食堂において、関係者約80名のご出席のもと立正大学博物館開館記念式典が開催されました。この日は、晴天のなか平成14年度立正大学入学式が行われており、入学式の諸行事が滞り無く終了した午後4時30分より、大学事務局副局長・堀越政利氏の司会進行により記念式典が開始されました。

はじめに立正大学学長吉田榮夫より、ご臨席の皆様へ御礼と博物館設立にご尽力いただいた関係各位への感謝の気持ちが述べられ、続いて初代館長に就任した坂詰秀一より博物館設立の経緯と展示資料の内容説明が述べられ、最後に「今後、自然誌関係・民俗関係も含めて規模は小さいながらも大学博物館として一味違った運営をしていければ幸いです」と、ご来賓各位に御礼と抱負を熱く語られました。

ご来賓代表では、東京大学大学院人文社会系研究科教授・今村啓爾様と埼玉県文化財保護審議会会長・柳田敏司様より、ご祝辞をいただきました。次に吉田立正大学学長より開館にあたり大変貴重な「撫石庵コレクション」をご寄贈いただいたビジネス教育出版社代表取締役会長、日本古鐘研究会会長・真鍋孝志様へ感謝状と記念品が贈呈されました。

続いて加藤吉則(立正大学学園常任理事・立正大学副学長)による乾杯の発声により祝宴に移りました。次いで感謝状を授与された真鍋孝志様よりご挨拶をいただきました。

また、同窓生、昭和46年文学部・史学科卒業の藤田富士夫様(富山市教育委員会埋蔵文化財センター所長)及び同54年文学部・史学科卒業の浅野毅様(静岡県立登呂博物館学芸員・主事)よりそれぞれ学生時代にキャンパス周辺の遺跡を求めて散策した思い出などを含めた祝辞をいただきました。

暫し歓談の後、主催者を代表して岩本俊郎(立正大学副学長)より、今後とも皆様のご支援ご鞭撻をお願いして、閉会しました。



開館式典(乾杯の光景)

ご出席いただいた来賓の方々には、以下の記念品をお渡しました。

- ・『梵鐘遍歴』(ビジネス教育出版社・真鍋孝志様より寄贈)
- ・『立正大学博物館学講座年報』第4号

(立正大学文学部より寄贈)

- ・『考古学論究』第8号・『考古学研究室彙報』第26号

(立正大学考古学会より寄贈)

- ・『立正大学博物館要説』・『立正大学博物館案内』
- ・ネクタイピン

(立正大学学園より寄贈)

なお式典にあたり、下記の皆様より生花と祝電を頂戴致しました。厚く御礼申し上げます。

(生花)

- |                       |       |
|-----------------------|-------|
| ①財団法人・古代学協会理事長        | 角田文衛様 |
| ②国土館大学名誉教授            | 大川 清様 |
| ③江戸東京博物館館長            | 竹内 誠様 |
| ④太田美術館副館長             | 永田生慈様 |
| ⑤佛教石造文化財研究所様          |       |
| ⑥(株)ニューサイエンス社 代表取締役社長 | 福田静江様 |

⑦文明堂印刷株式会社様

⑧(株)東ブリ 取締役社長 野口誠治様

⑨立正大学同窓会様

⑩立正大学橋父兄会様

(祝電)

⑪熊谷市長 小林一夫様

⑫千葉県立房総風土記の丘館長 阪田正一様

## 立正大学博物館運営委員名簿

第1号委員 坂詰秀一 博物館長(文学部教授)

第2号委員 上野恵司 専門職員  
(文学部特任講師)

第3号委員 清水千尋 法学部教授(法学部長)  
田口正己 社会福祉学部教授  
(社会福祉学部長)

第4号委員 佗美光彦 経済学部教授  
(経済研究所長)

千歳壽一 地球環境科学部教授  
(環境科学研究所長)

第5号委員 竹内 誠 文学部教授  
(博物館関係学識経験者)

第6号委員 野沢佳美 文学部専任講師  
(文化史関係学識経験者)

第7号委員 高津 弘 地球環境科学部助教授  
(自然誌関係学識経験者)

### 平成14年度 第1回博物館運営委員会

日時 平成14年6月3日(月)

AM 11:00 ~ PM 12:10

会場 大崎キャンパス 第5会議室

出席委員

坂詰秀一・清水千尋・田口正己・佗美光彦・  
竹内 誠・野沢佳美・上野恵司・田村佳道(事務局囑託)

博物館発足にあたり、業務を担当した加藤常任理事より開会に先立ち挨拶があった。

本日の出席者は7名、欠席者2名の報告があり、博物館規定第10条の2項により成立。

## NEWS

### 博物館開館記事一覧

平成14年3月27日(水) 読売新聞(埼玉)

♪ 3月29日(金) 朝日新聞(第2埼玉)

♪ 4月5日(金) 埼玉新聞(地域)

♪ 4月16日(火) 産経新聞(埼玉)

♪ 4月24日(水) 毎日新聞(埼玉)

♪ 5月1日(水) 読売新聞(文化欄)

♪ 7月4日(木) 週刊『仏教タイムス』

♪ 8月27日(火) 『江南よみうり』

♪ 6月30日『月刊考古学ジャーナル』

第489号(4月号)

♪ 8月1日『季刊考古学』第80号

### 博物館実習の実施

8月5日(月)~8月11日(日)

午前10:00~午後4:00 参加者 17名

### 来館者数

4月1日(月)~12月26日(金)

来館者数 2,578名(実習生を除く)

一般・学生来館者

4月 529名 5月 275名 6月 232名

7月 749名 9・10月 357名 11月 377名

12月 59名

(オープンキャンパス7月31日(水)・9月28日(土)・  
11月3日(日)来館人数を含む)

### 来館者往来

〔高等学校〕 埼玉県白岡高校・同国際学院高校・  
同深谷第1高校・同深谷高校・同吉見高校・同毛  
呂山高校・同本庄第1高校・同川口清陵高校・群  
馬県館林商工高校・同高崎北高校・同伊勢崎高校・  
鳥根県立立正大学浜南高校 (計12校)

〔団体〕 朝霞市博物館・行田市郷土博物館・熊  
谷市商工会議所・桑名市教育委員会・古鐘研究会・  
埼玉県埋蔵文化財保護審議会・埼玉県立さいたま  
川の博物館・埼玉県立歴史博物館・(財)埼玉県埋  
蔵文化財調査事業団・庄和町教育委員会・橘考古  
学会・玉川村教育委員会・東京都国分寺市教育委  
員会・所沢市立埋蔵文化財調査センター・日蓮宗  
宗務委員・東松山市埋蔵文化財センター

(計16団体)

### 出版NEWS

博物館の開館にあたり、下記の刊行物を発刊いたしました。

・『立正大学博物館案内』

・『立正大学博物館要説』

## 博物館視察報告

中国・大鐘寺古鐘博物館を訪ねて

上野恵司

博物館所蔵資料の中には、世界中の鐘を中心とする撫石庵コレクションがあります。このコレクションは、古鐘研究会会長・眞鍋孝志氏が収集され、博物館に寄贈された資料です。

その中でも、東南・南アジアを中心とする鐘は、日本・中国・朝鮮半島・タイ・ミャンマー・スリランカなどの各地にわたり、日本にいながら各地の鐘の比較研究ができる、貴重な資料となっています。この資料中、もっとも多く寄贈していただいた鐘が、中国鐘です。

中国鐘は、二つの形があり、一つは日本の梵鐘のような形をした「祖型鐘」、他は鐘の裾の部分<sup>そけいしやう</sup>がやや外側に開き、その部分が波状を呈す「荷葉鐘<sup>かようしやう</sup>」です。博物館所蔵の中国鐘は、この荷葉鐘が中心です。

立正大学の博物館に、この中国鐘が多く所蔵されていることは、日本における中国鐘の研究者である神崎勝氏（兵庫県・妙見山遺跡調査会）を通して中国に紹介され、中国で最も鐘を多く所蔵する北京・大鐘寺古鐘博物館から、立正大学の博物館の関係者に、一度是非来訪してほしいとの要望がありました。

このような状況の中で、大学内の仏教考古学研究奨励基金委員会（委員長・坂詰秀一）から、中国大鐘寺古鐘博物館に派遣していただけることになりました。期間は、平成14年9月5日から平成14年9月13日までの9日間、北京の古鐘博物館のほか、西安を中心に関連資料を、視察することになりました。

西安を選びました理由は、周知の通り古代の都、長安であり、シルクロードの出発点で、現在も都市を囲む城壁が遺り、都市の中心には鐘楼と鼓楼が建っているからです。特に、この鐘楼に懸かっていた鐘は、中国でも著名なものであり、現在それが博物館に展示してあり、詳細に見学できるからです。また、北京には、大鐘寺古鐘博物館があ

るからです。

最初に、西安を訪れました。西安では、事前に文学部史学科（中国古代史）の尾形勇教授のお知り合いである、国立陝西省歴史博物館、館長・周天游氏をご紹介して頂いておりましたので、真っ先にその博物館へ向かいました。

博物館では、館長室に案内され、直接館長・周天游先生にお会いし、西安の梵鐘についてご教示を頂きました。館長のお話によると、西安では唐の時代、鐘楼に懸けてあった鐘が現在、陝西省碑林博物館に展示してあるので、必ず見学するよう薦められました。また、中国では考古学的には鐘について研究している人が少ないので、頑張っ研究して欲しいとの激励を受け、博物館を後にしました。

碑林博物館は、市街地の東南地区に位置し、その名の通り碑文を中心に展示している博物館です。鐘は、博物館の建物の外、鐘用に造られた屋根と柱からなる建物の中央に置かれていました。この鐘は、唐の景雲2（711）年の紀年銘を有するもので、鐘高2.06m、口径1.67mを測る巨大なものでした。公表された図面から大きさは、ある程度わかっているつもりでしたが、改めてその大きさには驚かされました。しかし、実測図と実物が大きく異なっており、中国の鐘を理解する上で、図からの検討の危険性を強く感じさせられました。



北京・大鐘寺博物館の展示室



ついで、この鐘が実際に懸かっていた、鐘楼に向かいました。この鐘楼は、西安市街地の中心に位置し、隣接して鼓楼があります。明の洪武17(1384)年に建てられたもので、当初は広済街にあったものが、万暦10(1582)年にこの場所に移されました。鐘楼は木造建築で、高さ36m、外装は三階建てですが内装は二階で、高さ8mの煉瓦造りの基壇上に建っています。

鐘楼には、現在鐘は懸けられておらず、中では小型の鐘を多量に使った、雅楽のような演奏が時間制で行われていました。使用されている鐘の形を見ますと、立正大学博物館所蔵のものと、同形式のものが認められ参考になりました。

9日に、西安から北京に移動しました。北京では、今回の最大目的である北京市立大鐘寺古鐘博物館を訪れました。博物館は、現在は遺っていませんが城壁の外側、紫禁城からみると北西の位置、本学が夏休みに語学研修を行う北京師範大学や北京大学に近い場所にあります。

古鐘博物館は、清の雍正12(1734)年に建てられた寺で、本来は覚生寺といわれていました。明の永楽年間(15世紀)に、高さ6.75m、口径3.3m、重さ46.5tの永楽大鐘が寄贈されたことにより、大鐘寺と呼ばれるようになりました。現在は、寺院としては機能しておらず、北京市が買い上げ1985年10月に博物館としたものです。この博物館は、中国で最も鐘を保管している博物館で、その数約700点以上といわれます。

事前に連絡をしていたため、館長・高凱軍氏、副館長・全錦云女史が、お待ちしております。特に全錦云女史は、中国の梵鐘研究の第一人者であり、多くの御教示を頂きました。その後、古鐘博物館内を丁寧に案内して頂きました。とくに、永楽大鐘の大きさと、所蔵する鐘の多さには、本当に驚かされました。

館長の高氏からは、「鐘は世界中にあるものなので、当館と立正大学博物館が提携を結び、世界ベルシンポジウムなどを共催したい」と、立正大学博物館館長に伝えてほしいとの、伝言がありました。また、鐘に興味がある学生がいたら、是

非派遣してほしいとの言葉をいただき、大鐘寺古鐘博物館を後にしました。

また、北京では、坂詰館長に便宜を図っていただき、現在中国社会科学院考古研究所に留学している三宅俊彦氏とお会いしました。亡くなった三宅氏の祖父・俊成氏は、中国考古学の研究者でありました。会食を交えながら、中国の考古学の現状等と、鐘についての研究状況などについて、お話を伺いました。やはり、考古学的には実測図が日本ほど正確ではないということで、自分自身で実測することを、強く勧められました。

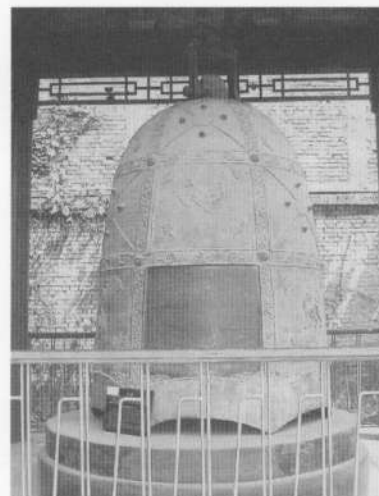
最後に、北京に現在残る鐘楼・鼓楼を見学しました。鐘楼・鼓楼は、隣接して位置しており、景山公園の北、治安門外大街の北端にあります。鼓楼は、現在修復中で中に入れませんでした。鐘楼は登ることができました。

鐘楼は、明の永楽18(1420)年に、元の万寧寺跡に建てられ、清の乾隆10(1745)年に再建されました。高さ約33mの煉瓦造りの楼閣で、中には高さ3.5m、直径1.5mの巨大な鐘が懸かっています。この鐘を見学し、13日に帰国しました。

今回の中国への視察は、学問的に中国鐘を学ぶうえで、また博物館の専門職員として今後の活動の方向性を考えるうえで貴重な体験となりました。

最後に、このような機会を与えていただいた、仏教考古学研究奨励基金委員会及びお世話になった関係各位に御礼を申し上げます。

(本館専門職員・文学部特任講師)



西安・陝西省碑林博物館の景雲二年鐘

## 展示資料の背景 (1)

### 旧石器時代の資料

坂詰秀一

#### (1) 北海道報徳遺跡

報徳遺跡は、昭和31(1956)年8月に発掘調査を実施した。当時、文学部社会学科に在学していた鈴木智正君から郷里の畑より採集した「黒曜石製の石刃」を手渡されたことが切っ掛けであった。その頃、石器時代に関心を持っていた私は、一見して考古学界で話題となっている北海道樽岸遺跡(寿都郡)出土の石器群に類似している資料と直感した。そこで鈴木君に是非とも出土地を調査したい、との希望を話したところ即座に承知してくれたので、久保常晴先生、学友の細澤順司さんと3人で北海道の踏査行の折、美幌に立寄り、鈴木君のご尊父のご協力のもとに試掘調査を試みたのである。展示の石刃群はその時の出土資料である。この石刃群は、更新世の末一旧石器時代後期の段階の所産と考えられ、近似する資料は、樽岸遺跡のほか、豊田遺跡(北見郡)出土の資料があった。調査報告は「北海道網走郡報徳発見の無土器文化(予報)」(『銅鐸』13. 昭32. 9)と題して発表し、また、報徳の資料観察の結果にそくして「北海道東部に於ける無土器文化の一樣相」(『先史時代』6. 昭33. 8)を執筆した。尚、この調査については、北海道大学医学部の大場利夫先生よりご教示を頂いたことを忘れることができない。

#### (2) 北海道白滝遺跡

北海道における旧石器時代の代表的遺跡として知られる、白滝遺跡(紋別郡)の出土資料である。報徳遺跡の調査の前後に北海道の各地を徘徊したが、その時の採集品の一つである。尚、立正大学史学科に在学していた三好寛君からの寄贈品も含まれている。

#### (3) 千葉県住野遺跡

玉類を多く出土する縄文時代後期の富里・高野台遺跡を踏査した際(高野台の垂玉資料については「千葉県高里村高野台出土の垂玉」『古代』31. 昭34. 1として発表)、住野で採集した搔器。この石器については

「下総台地発見の無土器文化遺跡」(『関東ローム』10. 昭33. 7)として発表した。千葉県における旧石器時代遺跡の存在例の報告として初期のものである。

#### (4) 神奈川県箱根・朝日遺跡

昭和36年『朝日新聞』(朝刊)に連載された獅子文六の『箱根山』に登場する遺跡として話題になった遺跡である。『箱根山』に登場する主人公のモデルである松坂康氏(芦之湯・松坂屋旅館主・チャールズ会所属)と旧知の城所晋氏の依頼によって芦之湯の朝日丘陵を調査し、旧石器時代の遺跡であることを確認した。小説「“箱根山”の舞台で発見」と話題となり、『朝日新聞』(朝刊)の昭和36年10月6日に大きく紹介された。当時、朝日新聞の学芸部記者であった森本哲郎氏、東京大学講師であった芹沢長介先生と芦之湯に出向き松坂屋旅館で石器を改めて観察したことが思い出される。この確認の結果、昭和36年11月に芦刈研究会と立正大学考古学研究室が共同して発掘を実施し、ローム層中から出土することが明らかにされた。展示資料はその折の出土資料の一部である(同資料は松坂屋旅館の資料展示室にも展示されている)。調査の結果については、日本考古学協会第28回総会で発表(「神奈川県箱根町朝日遺跡の調査」昭37. 4)、一方、「小説“箱根山”からの発掘—芦之湯の旧石器遺跡—」(『科学朝日』22-6. 昭37. 2)及び『箱根町誌』1(昭42. 3)に概要を発表した。本遺跡は、神奈川県で最初に発掘された旧石器時代の遺跡として知られ、現在、発掘地には石碑(裏面に「立正大学考古学研究室発掘」と刻まれている)が建てられ、中曽根康弘元首相の揮毫による遺跡名が訪れる人を迎えてくれる。

#### (5) 埼玉県立正大学内遺跡

立正大学内遺跡X地点からナイフ形石器を主とする旧石器時代後期の遺物が出土している(立正大学『遺跡調査室年報』Ⅶ、平成7.3)。平成6(1983)年に発掘された資料である。

(本館館長・文学部教授)

## 博物館実習

### 実習を終えて

内田勇樹

私は、平成14年8月5日（月）から11日（日）の7日間、立正大学博物館での館務実習に参加しました。

館務実習は、全部で17人が参加し、4人ずつ4班に分かれて作業を行いました。

初日は、午前中に坂詰秀一館長の挨拶と館の概要説明があり、午後は写真撮影を行いました。写真撮影は、まず土器を題材にして各自3枚の露出の違う写真を撮り、次に自分で撮影する資料を博物館資料の中から選び、各自で露出やシャッタースピードを決めて撮影を行いました。2日目は、午前中は初日に続き写真撮影を行いました。午後は、吉川國男先生（立正大学非常勤講師・元埼玉県立さきたま資料館長）の講義を受けました。講義は、学芸員の日と博物館の裏表として、学芸員が博物館でどのような作業をしているのか、また、博物館の良い点、悪い点などについて話されました。

3日目は、土器の洗浄作業を行いました。外での作業のため、暑さが心配でしたが、特に問題もなくスムーズに行えました。4日目は、説明パネルの作成を行いました。題材は、「須恵器とは」「硯とは」「文字瓦、郡名瓦について」「郡の地名」「骨蔵器について」「ティラウラコット遺跡について」「新久窯跡について」「考古学年表」などで、それぞれ各班で分担し、午前中は図書館などで調べ、午後は調べたものを、「のりパネ」とよばれるパネルに貼り付けて、お互いが出来上がったパネルを評価しあい、その後、見学者が見やすい配置について試行錯誤しながら設置しました。全員が、博物館で実際に使っていただけるということで、真剣に取り組み、見やすく綺麗なパネル作りができたと思います。5日目は、3日目に洗浄した土器の接合作業を行いました。結構たくさんあったものの、なかなか接合できず難しかったです。6日目は、午前中に拓本をとる作業を行い、途中から石膏を入れる作業に移りました。15時ごろか

ら実習を振り返っての反省会を開きました。実習生は各専攻分野が違い、仏教学部仏教学科、文学部哲学科・史学科・国文科、地球環境科学部システム環境学科・地理学科、など各分野思い描く博物館や博物館に対する希望などが違い、違う分野の人たちの意見が聞けて大変参考になりました。最終日は、1日自然史の講義を島津弘先生（地球環境科学部助教授）より受けました。午前中は、自然史学とは一体どういうものかということについて講義を受けました。午後は、「景観復原」という空中写真や地形図を使い、ある地域がどのように変化してきたか考えていくという作業を行いました。空中写真は、空中写真実体鏡という、2枚の少し位置がずれた写真を使ってその写真に映された地形を立体的に見えるようにする機械を使い、地形を観察しました。また地形図は、明治17年、明治45年、昭和34年、昭和49年、平成5年のものを畑や田、林など土地利用ごとに色分けをし、その土地がどのように変化してきたかみんなで考えました。

以上、7日間の館務実習に参加しましたが、実際、実習スペースとして使ったのは第2展示室の一角であり、全体的にはもう少し場所があると作業などがやりやすかったなと思いました。7日間という制約された期間ではありましたが、その中で大変なことや楽しいことなど多くの貴重な体験させてもらい、有意義な実習になったと思います。

（立正大学大学院修士課程1年）



館務実習光景

## 来館者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様のご意向を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で選択させて頂いたものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきます。

- ・新聞で、立正大学の熊谷キャンパスに博物館がオープンしたことを知りました。早速見学にきましたが、まずこんなに展示物が多いのに驚きました。考古学に特に興味を持っていたのですが、立正大学が10年間もネパールで地下発掘をしていたのは知らなかったので、私にとっては新たな発見でした。遠くからわざわざ見に来た甲斐がありました。また機会があったら是非もう一度来てみたいです。
- ・大学にこのような施設があることは、大学改革の先端に行くようで大変すばらしいことだと思います。気軽に入ってみたくれどもとても勉強に

なりました。

- ・私は鐘に興味をもっておりますので、「撫石庵コレクション」のアジア各国の鐘は非常に美しいと感じました。友人たちに大いに広めたいと思います。
- ・新聞の記事で坂詰先生が初代館長に就任されたことを知り、見学にきました。吉田格先生の資料が大学に寄贈されていることは知らず、その中に伊藤圭介が収集した石鏃が含まれているということには大変驚きました。伊藤圭介の名はかねてからシモバシラの学名 (*keiskea japonica*) で植物学者として承知していたからです。
- ・とても楽しく見学しましたが、なんとなく玄関が暗く入りづらい感じがします。もうちょっと明るく、開館日等のお知らせも目に付くよう工夫をされてはいかがでしょうか。

## 利用案内

所在地：〒360-0161

埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金曜日（大学休業中を除く）

開館時間：10:00～16:00

\*火・土・日・祝日、及び大学休業中（夏・冬・春期休暇等）に開館を希望する人は、事前に博物館

あるいは総務部総務課（048-536-6010）にご連絡ください。

交通機関：JR高崎線（上野から55分）、上越・長野新幹線（上野から35分）、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際バス）で約10分。東武東上線（池袋から56分）「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際バス）で約12分。

## あとがき

4月1日に無事、博物館が開館しました。開館式典・来館者の対応そして館務実習と不慣れながら、忙しい毎日を過ごしてきました。この「万吉だより」日々の博物館の活動を、少しでも知っていただければ幸いです。今後さらなる内容の充実に努め、号を重ねたいと考えております。不備な点が多いと思いますが、今後の博物館活動へのご支援を宜しく願います。（上野）

題字揮毫 田淵 観 斎 氏（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報 「万吉だより」 創刊号

平成15年3月1日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170